
樹竜の旅

リュリュー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

樹竜の旅

【Zコード】

Z0641P

【作者名】

リュリュー

【あらすじ】

神竜の若者と狐の少女の物語

旅の竜の若者が、ふと立ち寄った寂れた国で
キツネの少女を差し出されて…。

1 荒廃の街

「なんだ これは。」

古くから王権が続くレイルシティ。その街の入り口に降り立った俺は、荒廃した街並みをみて驚きを隠せなかつた。

街の入り口から続く大通りの左右には、屋根が全て崩れ壁の衝立や骨組みが丸見えになつた家がいくつも見えていた。その間にある空き地では鏽だらけの機械の残骸が放置され、

その隙間からイネ科やチコリ科の雑草が残骸を隠すように生い茂つていた。獣達が生活していた証として、掲示板には真新しい求人募集の用紙や官報が貼ら

れていたが、その掲示板も角が消えてもうボロボロだ。スラム特有の廃棄物の山やバラックは見られなかつたが、

大通りから外れれば目の当たりにするのだろう。

街の中心部へ歩くにつれ、その酷さが一層際だつて見えた。増え始めた商店や屋台の店

先を覗くと、あるいは値段が殴り書きされた品物が二つ三つ置いてあるだけ。品物が何も

置かれていない店も少なくなかつた。更に進むと近代的なビルも所々に見えるようになつてきたが、どれもボロボロで鉄骨がむき出しおままだつた。中には上半分が崩れてそのまま放置されているビルもある。

「酷いや……僕たち道を間違えていないですかね？」

俺の隣を歩く少年が、そんな廃墟のよつた街並みを信じられないみな顔つきで見回していた。

「地図を見る限り間違いはないよ。でも……一体どうなつているんだ？仮にも一国の首都の中心街だぞここは……。」

「僕が聞きたいですよそんなこと……。やつと街のホテルでゆっくり休めると思ったのに……。」

「正直ホテルじゃないかもしけないな……。こんなとこりにケモノが大勢生きていけるのが不思議な位なんだから。」

そう言つと、俺は歩道の至る所で座り込んでいる獣達に目を向けてみた。……ニヤニヤと笑いながら喋つてこむ所を見ると、飢えて座り込んでゐる……ところづわけではなさうだ。

「単に暇つぶしで座つてこむみたいですね。でも生活のオカネや食糧はどうしているんで

「 ？」

「 わからないねえ。あの商店を見る限り、店で賄つてゐるとは思えないし。大きな闇市も全く見ないな。クリオ、これじゃホテルが見つかっても、」飯抜きになりそうだな…。」

「 吞氣なんだから…。そのホテルそのものが見つからなかつたらどうする…あれ？」

クリオと呼ばれた少年が言つたその時、俺達の直ぐ脇をこれまで目にすることのなかつた大型のトラックが通り過ぎ、すぐ前の路肩で車体を軋ませて停車した。その途端、周囲をぶらついていた人々が何かを口々に叫ぶと、そのトラックを追いかけ始めた。トラックを追う最後尾を走るイヌの尻尾が激しく揺れているのが分かる。

「 何をしているんでしょう…あれって？」

獸だかりに近づくと、トラックに積まれた大型のコンテナが、次から次へと地面へと下ろされている。最寄りの建物からは人が現れ、何かを叫ぶと集まつた群衆を脇へと追いやつていた。その間にも群衆が次々と集まり、小競り合いが起つた。長蛇の列を作り始めた。その間にも群衆が次々と集まり、小競り合いが起つた。長蛇の列を作り始めた。列の先頭で何かを受け取り、足早に立ち去る黒ネコのつちゃんが持つていてモノをみると、紙箱に入ったクラッカーに、銀色に光る缶詰らしきものが二つ三つ…。

「あれつてもしかして配給所でしょうか……？」

「うん……。どうやらそうみたいだね。あのクラッカーや缶詰つてこの国内で作られたモノではなさそうだし。あれがちゃんと行き渡れば飢饉つてことはなさそうだし、とりあえずは大丈夫かな。」

「大丈夫じゃないですよ。これじゃあ僕らの今日の夕飯、下手したらクラッカーの残りカスだけしか……イタツ……！」

（ドンッ）

不意に、鈍いと音と共に、クリオの身体が前のめりに倒れた。よそ見をしていたイタチの若者が、歩道の陥没した穴につまずき、前方にいたクリオにそのままぶつかつたのだ。――

瞬顔をしかめた若者は、ぶつかつて転んだクリオをめんどくさそうに一通り眺めたが、「ふつ。」と鼻で笑うと、そのまま背を向け歩き出した。

「おーっ、何だ今の「ふつ。」は？」

俺はそう怒鳴ると、立ち去るのとするイタチの若者の肩を掴んだ。ギッと若者を睨むと、若者も見上げるよつたな格好で睨み返してきた。

「なんだよ、そんなお前には関係ないだろー。団体でかいからって偉そうな事言つんじや

ねえ。

若者は早口でそう言い捨てると、もつ吐はないどばかりにクルリと背を向けた。再び歩き出す若者に向かって、俺は肩の毛にぐいっ…と指を食い込ませた。このまま知らん顔で立ち去られたまるものかっ。

「痛えつ！何するんだ！！」

「悪いことすれば痛いのは当たり前だ！形だけでも良いからクリオに謝れ！」

「ふざけるな！何で俺の得にならないことをしないといけないんだ。てめえはこの国へのボ国王の知り合いか、それとも神の化身の竜様か？たとえそうだとしても俺に指図するんじゃねえ！」

今度こそ本当にふりほどいたのか、若者は思いきり肩を振り
払つた。その時、彼の腕に俺のマントが引っかかり、ぱさりとマン
トが捲れ上がつた。

「あつ！――！」

若者が小さく叫んだ。余程驚いたのだろう、マントの端が手からこぼれ落ちたが、目は俺を凝視したままだ。

「なつ……おおえ……おおえ……？」

「アイラス＝ラ＝ドラグーン＝プラト。」

「なつ！？」

「ドラグーン」という言葉を聞いた瞬間、若者は電気に打たれたように硬直した。

「お、おまえまさか…。いや、あなた様は…な、何かの[冗談じや…」

「竜だ。これでもまだ『冗談』と言つつもりか?」

間髪入れずにそう答えると、俺はマントを取り払った。露わになつたのは、クリーム色の体毛と、全く同色の大きな鳥のような翼。大陸で神様と崇められている竜。それが俺の正体だつた。竜の翼を見られてしまつた以上、もうマントで隠す意味はない。

「わあああつ！・！・！・！」

羽を一目見るなり、若者は尻尾まで毛が逆立てるに、背を向けてよろめきながら逃げ出した。若者の叫び声に配給の列に並んでいた人々もめんどうさそうな顔でこつちを振り向いたが、その途端一帯は火のついたような騒ぎになつた。

「竜!? あれ確かに竜様じやないかつ! ?」

「間違いない…竜だ！」

「誰か、早くお偉ごせんに通報……！」

「バカ、またとないチャンスなのにあの連中に教えるな。金だ…金きつと持つてる筈だ。」

「大丈夫なのか？神様じゃなくて本当は悪魔だつて噂も…？」

「神様だつと悪魔だつとそんなことどうでもいい…！…凄い権力を持つてるぞ、権力が。」

配給所の列はあつと/or/いう間に消えさつた。居合わせた人々は俺を距離を置いて取り囲み、

遠くの建物の角や、窓からチラチラと覗いている。憎悪や恐怖の表情はなく、珍獸を見て

いるような目で見ているが、正直いい気はしない。

「やつぱり正体をばらすんじゃなかつたかな…。」

マントをクルクルと畳んでカバンにしまい込むと俺はため息をついた。

「なんだこりや、凄い歓迎ぶりじゃないですか…。」

竜を見た瞬間の住民の豹変ぶりに、クリオが啞然として周囲を見回す。クリオも俺が竜で

あることは承知していたが、さほど気にせず他の獸同様の扱いで俺に接していた。まあ、

それゆえに同行をしているとも言えるだらう。

「だらうね。この国だと竜の俺を味方につけたら望むモノが手に入るって言い伝えがある

つて聞いていたから。しかし、まさかこれほど大騒ぎになるとは思

わなかつたな……。」

「いいじゃないですか、だつて神様なんでしょう？凄く歓迎されるってことじゃないですか？」

「全然良くないぞ。どうも竜としてじゃなく、都合のよい願いマシンがやって来たとしか思っていないみたいだし。ほら、特にそう思つていうそな奴らがやつてきたぞ。」

群衆が犇めく通りの更に向こうと田をいりすと、数台の車両が土煙を上げてここに向かっているのが分かった。車の群は周囲の群衆を追い散らすと、俺を取り囲むようにして停車した。車からは戦闘服に身を包んだ兵士達が次々と現れた。

「驚いた、本当に竜様だつ……！」

一番中心に陣取っていた黒い車からは、毛の色が薄くなつた小柄な鼠が姿を見せた。不釣り合いなほどやけに派手な服装に、勲章らしきモノがいくつも縫いつけられている。配給

の途中、半ば強引に立ち去られた人々は、半ば憎悪に近い表情で連中を睨んでいたが、そんな視線を気に掛けず、俺に田を向けるなり喜びを露わに話しかけてきた。

「よつこそ我が国に、いらっしゃいました！何という幸運なんだ、間違いなく竜神様です

ね……？

「ええ……。竜である」とは否定しません。一族が決めている巡査の旅で大陸の回国をしているといふのです。正確にはこの国が一番最後の巡査地なのですけれどね……。」

「素晴らしい……！これでこの国も一層豊かになるだつ。こんな汚れたところは竜様が居る場所にふさわしくありません、私たちが直々に安全と快適を約束する場所まで」案内しますので、どうか同行を……。おいつ、そこのシバイヌのガキ！何だお前は？」

「やめてください……」の子は私が依頼した旅のガイドですよ……。」

俺は慌てて初老の言葉を遮つた。本当は旅先で旅費を無くして途方に暮れていたシバイヌ少年を俺がガイドの名目で共に旅をしていたのだった。もつともそれを持つたら即座にクリオもその場から追い払っていたに違いない。

「それとお心遣いは有り難いですが、まだ自分は旅の途中ですし、竜だからって特別扱いをされたいとは思いません。」

「「」もつともです。しかし神聖な竜様である以上、我々のもてなしに対してはお断りせずご厚意を受けて頂くのが道理かと思われますが……？」

言葉遣いは一寧だつたが、選択の余地は『えられなかつた。慇懃無礼とはまさにこのことだろつ。

「分かりました、ならば参りましょう。但し、クリオも一緒です。さもなければどんな待遇であろうと、私は城にいきませんよ。」

「かしこまりました。ではどうぞお越しください。」

俺の答えに初老の男は満足げに乗つていた車へと歩き出す。

「本当にいくの?」こんな連中と。

傍らでクリオが憮然とした表情で囁く。シバイヌのガキと言われたことに内心腹を立てて いただろつ。

「行くぞ。」の分だとまともなホテルが見つかりそうもないし。」

そこまで言つと、俺は身を屈め、初老が開いた車へ乗り込んだ。

2 国王と少女

車に乗せられて案内された先は市街地中心の更に奥に建てられたお城だつた。どう

やら数百年前に建てられたお城を、そのまま国王宮として使用しているらしい。城の正面

玄関にたどり着くと、俺達は休息もそこそこに、要人との小規模な

会食で使われる部屋へと通された。

豊かさとはかけ離れたような国内だったが、ここだけは贅がつくされていた。部屋の壁と床には全て大理石が埋め込まれており、中央には見たことのないような絵が設置されていた。シルクのテーブルクロスがかけられたテーブルの上には銀で出来た器や燭台、そしてクーラーから取り出されたばかりのワインが置かれていた。外の寂れた風景と、この部屋を見ただけで、もうこの国の縮図を7・8割方を把握できた気がした。

「ようこそおいで下さいました。」

30分ほどその部屋で待たされたところで、ようやく国王らしき黒ウサギがやって来た。ウサギの割に大柄な身体をしていたが、それなりの威厳を持ち合わせてはいるようだった。表面上は笑顔を浮かべて友好的であったが、背後には武器を手にした護衛が6人、冷たい目で俺のことを見つめていた。

「歓迎して頂きありがとうございます。みんな竜様…って呼んでいますが、アイラス…という私の名前で呼んで結構ですよ。」

「竜様と呼ばせて下さい。高貴な存在の現神竜なのですよあなたは…この国で竜を最後に

見たのは200年は前といつゝただがら生きて出合えるなんて私も運が良い！！どうです
「の國は？」

「まだ入国したばかりの國ですか？全てを見たわけではありません。ただ、今見た限りだと私にとつて好ましくありません。それと軍の國民の扱いが少々荒らすぎるようですが？」

背後の兵士の目が険しくなつたが俺はそっぽを向いた。これでもかなり抑えて言つた方だ。
実際、ここに来る途中でも車の行く先にいる住民を、次々と追い立てていたのを俺は目の当たりにしている。

「私はあちこちの國を旅してきましたが、國民あつての國だといつことを忘れてしまつてはなりません。神龍と崇めるなり、そのことをまず尻尾の先にまで銘じてください。」

「まあ、今はそんな話はなしだ。それより龍神様に頼みがある。お聞きできるだらうね？」

この國王は俺の忠告は真剣に聞くつもりはないようだつた。彼からみたらその程度の問題なのだらう。

「頼みとは…何をするのですか？」

「簡単なことですよ。この城にしづらへ逗留していただきたい…？別に龍神様に何かして

「 貰うと言つ訳じゅありません。」この城に逗留している間は何をして
も自由です。」

「 何故そんなことを? それをやつてあなた方に何の得があるのです
? 」

訳がわからない表情のクリオの言葉に、国王は大きく胸を反らせた。

「 この国の言い伝えですよ。竜がやつて来たら国は豊かになるって。
竜が現に200年前
に竜が逗留した時も、わが国は劇的に豊かになつてと言われていま
すから。」

なるほど……」この國王も竜の言い伝えを知つてゐるみたいだ。

「 それ単に偶然だつたらどうするんですか? 後からセキーンを押しつ
けられても困りますよ。」

「 そうだとしても構いません。別に幸運を呼び込まなくともあなた
がここに居てくれるだ
けで、ありとあらゆるモノが献上されるでしょう。私 いや、神様
に逆らう獸は居なくな
るでしょう。」

「 竜の威を借りるウサギ……。」

クリオの眩さに思わず頷きそうにならざつた。竜の俺を引き
留めて利用しようとする
る魂胆を隠すつもつすらないらし。

「 勿論お礼は致します。当面の生活資金として1000万フアリ。
その他月々250万フ
アリを用意します。それでも足らなければもつと……。」

「いりません。」

躊躇せずに俺は断つた。

「何故つ？」

幾分上ずつた言葉が広間にこだました。俺がお金に全く興味を示していないコトが信じられないらしい。

「そ、それではこの国家予算から特別手当や食糧を…。それでも不足ならば前の竜様が発掘した金山の権利もアナタに。」

「いらない。世界中の金山を差し出すつて約束しても、私には一文の価値もありません。」

俺の言葉に国王にますます困惑したような表情になつた。

「では何がお望みなのですか？私にできぬことならばなんひとつあります…から…」

「その出来ることをアナタは全くやるつとしないませんね。やつをから聞いてみると、アナタ全然苦労せずに金で物事を進めよつとしているでしょ？？そんなのでは協力する気にもなれません。たとえば、アナタに命そのものを差し出す覚悟が出来ますか？」

俺はそう答えるとつるたえてくる国王をじっと見つめた。オカネや

権力が全てと思つてゐる国王を「これで戒めるつもりだつた。

ところが、この国王はこの言葉をどう解釈をしたのか、とんでもないことを言い出してきた。

「なるほど分かりました。ならば早速イケーハを用意しよ!」

「はあつー?」

素つ頬狂な声を上げたのはクリオだつた。

「如何です、命を差し出す覚悟はあるかとおつしゃいましたね。構いません、命そのものを差し出す」とも私にはたやすいことです!「なんかもうダメだこのオッサン。」口ノ箱に捨てられてそのまま沈んでしまえ。」

隣で耳を垂らしたクリオのうめき声が聞こえてきた。俺はもう呆れて何も言つ氣が起こらない。このおっさんの病氣は最早手遅れだな

…」

「おや、どうしました?お望みだつたら一人と言わば何人でも」用意致しますよ。幸運を呼び込む龍様のためならば、それくらいどうつてこと…。」

もう少しひれ以上聞く氣になれなかつた。何か一つ言つてやつてから中座しようと思つて始めたその時だつた。

(バタバタバタ…ガガツ)

「…………」

不意に静かだつた広間の外からバタバタとした足音が聞こえてきた。時折怒号らしい牡の声も聞こえてくる。

「おい…外の騒ぎは一体なんだ！？」

国王が怪訝な表情でピンチと耳を立てたその時、バタン…という派手な音と共に少女が一人が飛び込んできた。

「うわっ…！？」

「女の子！」

飛び込んできたのは狐の少女だつた。身体は淡黄色の毛に包まれ、尻尾の付け根まで伸びた髪が左右に振られている。胸には何かの像を大事そうに抱えていたが腕に隠されて良く見えなかつた。飛び込んできた彼女は、そのまま広間をかけだしたが、そのまま直ぐ後からやつてきた衛兵らしき面々にあつと/or>う間に取り押さえられてしまつていた。

「さあ…それをそつちによこせーこの小娘が！」

「いやーーおじいちゃんの形見…絶対嫌！」

彼女の甲高い声が広間に響く。捕まつてもなお大の大人達が少女を追いかけ組み伏せる、明らかに異様な光景だつた。

「やめろー！竜様の目の前で何と言つことか！」

国王の怒鳴り声に、衛兵達がハツとなつてこちらを見た。その途端、取り押さえられた猛烈に女の子が暴れ始め、突き飛ばされた衛兵の一人がテーブルに衝突した。

(ガチャンッ！…)

広間に響くほどの音と共に、テーブルにあつたワイン入りのグラスが宙に舞つた。

一つは俺の近くの床に落ち、そしてもう一つは…

「あやあつー！」

向かい側の国王から叫び声が上がつた。飛んできたグラスをよけ損ねて、顔の左半分にワインを完全に浴びてしまつていた。

「うわあ、一色刷の縞模様だ…いい気味。」

「シッ…国王に聞こえるつて。」

すぐさま護衛達がタオルを渡し、顔を何回もこすつていたが、顔半分についた赤い染みは落ちることはなかつた。ちゃんとした石鹼で直ぐに洗わないと、毛が抜けきるままでこのままだろう。

正直胸がシッとしたけれど、このままでは彼女の運命を放つておく訳にはいなかつた。

衛兵達がまだ呆然としているのを見ると、俺はバサリと翼を広げる

と彼女と衛兵との間に
素早く割りこんだ。

「一体何があつたんですか？」

「ハッ！」の小娘は両親の借金のカタに城で働かせていた奴隸でしたが、強制労働免除の引き替えに、持っていた高額な銀の像を差し出す約束をしていました。しかし、いざ差し出すところに、急に嫌がって持ち逃げして……。」

「嘘つ。勝手に私を奴隸にして無理矢理取り上げよつとしたんでしょつ、おじいちゃんの形見なのに……。」

「貴様は黙つてろ……」の小娘！

怒鳴り声に少女はビクッと耳を縮じませた。衛兵達は更に言葉を続ける。

「今回の『無礼をお許し下せ』。この小娘については我々が責任をもつて裁きます。」「裁く……ってこの子ですか？」「勿論です。国王を侮辱した罪を徹底的に償つて貰いますよ……今は。」

絶対に容赦しないぞ……と血わきばかりの口づつだった。もつ彼女を許すつもりは決してないだろ。よし、それならば……。

「国王！今のイケニヒの話しだすがこの子をイケニヒにします！！
ですから衛兵達には手
を出させないで下さい。」

「な、なんですかって！？」

流石の国王も驚いたのだろう。半分が真っ赤になつた顔を思い切り
ゆがめ、もの凄い表情になつっていた。見ている俺は平静を装つてゐるが、心中ではあまりの光景に笑いを堪え
るのに必死だつた。

「イケニエです。先程言つていたイケニエですが、この子を希望します。」

俺はさうばかりと言ひはなつた。俺の背後ではキツネの少女が俺と國王、そして手を出せず
に悔しがつてゐる衛兵達を不安そうに見比べてゐる。

「では、我々のお願いを聞いて頂けるのですね？」

「まだ確実に決めたわけではありません。ただ、今日は遅いです
直ぐに答えは出せませ
ん、少しのあいだ考え方せて下さい。」

あとで竜様の所へと
連れてゆけ。
」

「かしじました。さあ、貴様はじつに来るんだー。国王陛下の顔を面白...こやこんな

！」

「国王に敬礼すると、衛兵達は震えているキツネの少女を俺から引き離した。尻尾をわしづかみにして連れて行くひきゆつのを見て、俺は慌てて衛兵達を呼び止める。

「待て。連れてくるまで「この子には傷一つ付けるな。一つでも切り傷や痣がある状態で連れきいたらもう話はそこで終わりにするのだ。」

「か、かじこまつました…。しかしそれならあんな小娘でなく他の選りすぐりの離を…?」

「この子です。それ以外の子を押しつけたらもうこの国には私は来ませぬ。」

「は、はいっ…。」

「…國王、最後に一つお聞きしたいことが…。」「なんだね…?」「アナタの本当の目的…いや願いはなんなのでしょう?」「今の平穀をそのまま維持することだな。今の件は由々しき事態だが素晴らしいこの国だ、ここは。更に龍様がいれば国は一層豊んでいくかと。」「

「つまら…一生、この国のトップでいたいのですね?」

「 もちろんだ。誰が何と言おうと、繁栄の国家レイルシティは私のものだ。 」

ワインまみれになりながらも、誇らしげに言つ国王の姿を、俺は何も言わずに見つめていた。

3 生け贋の少女

「 ふわふわふわふわふわ。 」

面会を終え、国王と護衛が立ち去つた所で俺は大きくため息をついた。国王の退席した後で、やる気のなさげな案内役の兵士がこの後の予定を説明したが、今は立ち去り部屋には俺とクリオの一人だけが残された。

「 とんだ茶番を見せつけてくれたな…あのダメ国王…。 」

リビング天井のシャンデリアを見上げると、俺はぼつりと呟いた。
残された燭台を弄つて
いたクリオが、俺の言葉を聞いてこちらに向き直つた。

「 何というか滅茶苦茶だよ…。 権力を持つと国王も街もみんなあんなつちやうのかな。 」

「 いや、権力のせいだけじゃこつはならないよ。 たとえ独裁国家だとしても、指導者はソ

レ相応の信念や理念は持つて居るし、住民たってその中で逞しく生きてることが多いんだ。

けれどここでは住民も国王もどちらもそんなことはなかつた。多分別の理由があつたんじやないかな……？」

「別の理由って何が？」

「多分歴史だらう……。ただ、ガイドじゃないから俺も詳しい過去は分からぬ。ちょっとそれを調べてみようか……？」

リビング隅に置かれていた本棚には新旧様々な本が置かれていた。俺はそこから歴史書をいくつか引き出すと一つ一つページを捲つてみる。誤字脱字の多い最新の本は国や国王を賛辞することばかり書かれていて殆ど役に立たなかつたが、どうにかこの国のことについて知ることができた。

それによると、この国は元々はファイン大陸の中でも近代化を進められたかなり裕福な国であつたらしい。瘦せた土地だったので農業は発達しなかつたが、周囲の鉱山から取れる金や銀で国そのものが潤つていた。一時は大陸一番の経済が流れていたらしい。

その状況が一変したのは今から50年前。これまで増える一方だつた銀の採掘量が突如半減した。勿論まだ産業を転換させれば国の水準を維持できるだけ

の資源が残されていた

が、あるつことか当時の人々は、残された資源を独占しようと奪い合つためだけに使ってしまつた。恐らく今あるものを食いつぶす生活に慣れきつてしまつた。恐らく今までの生活に慣れきつてしまつた結果だつた。たちまち国は貧困に陥り、残された住民は配給を貰つて生活に落ちていつた。

今の国王が就任したのは丁度そんな時だつた。特にこれといつた政策を見いだせないまま20年も同じ社会が続き、今なおそれが続いている。

「やつこじとだつたのか…。栄枯盛衰…とは言つたモノだな。」

古い本に記載されていた在りし日の街の写真を見て俺はため息をついた。途中で見たボロボロのビル群はおそらくまだ国が裕福だつた時に建てられたものだらう。今ではもう見る影もない。

「でもわからないな…。豊かだつた頃の面影はあるはずなのに何もしないだなんて。やつぱりあの王様がぜへんぶ悪いのかな。」

「多分…向上心が無くなつてしまつたんだな…。」

読んだ本を全て棚へと戻しながら、俺は答えた。

「あの国王もどうしようもなかつたけれど、さつき街を歩いたときに配給所や車から見た

人達を見ただろう? ハハの国の人達、俺さえ手中に收められればあとはオカネや幸運が転がり込んでくるとでも思つてゐるみたいだつたし…。人の心も貧しくなつちゃつたみたいだ。」

「それじゃあ、あの王様を追い出して、アイラスさんが代わりにこの国の王様になればいいじゃないですか。そつすればみんな神様を見習つて心を入れ替えるかも? それにアイラスさんの性格なら、きっとといい王様になれますよ。」

「『ゴメンだよ。どんな神様でも一人だけじゃ國をまともに動かせない。』

「やつですか。竜が王様の国つて素敵だと思つたけれどなあ…。」

クリオはほんの少し残念そつそつと、尻尾をピンと伸ばしつゝんと伸び上がつた。

「とりあえず部屋に案内されたら僕はひとつと休もうつと。なんだか今日一日だけで、半年

年分の出来事がいつぺんに来たみたいで、正直疲れちゃつた。」

「お疲れ様。けれど、休むところはさつきの兵士の言つとおりで良かったのかい?」

先程の兵士の説明だと、ここでの俺の滞在先は城に隣接する離宮との話しだつたが、

クリオに宛われた寝室は城内で働く人達用の個室だった。つまり実質的にバラバラで滞在することになる。

「いいのいいの。城内に部屋がある方が色々情報が得られて、ガイドとして都合が良いもの。それにしても、この国には一体いつまで残るつもりなのさ?」

「まだ分からないな。さつき成り行きでああ言つたこともあるけれど、俺も出来ることはやれるだけやりたいからね。クリオ、君じきはビリするんだ?」

「アイラスさんが残るなら僕だって残りますよ。名田とはいえガイドとしての役目を最後までつとめたいです。」「

クリオは自信たっぷりにそう答えた。

入城した時と同じく30分程待たされたところでの、ようやく案内役の兵士から声がかかり、俺は離宮へと案内された。離宮と言つても寝室と食堂を兼ねたリビングがあるだけの小規模な建物だったが、それでも一人で使うには広すぎる大きさはあつた。ここも贅が尽くされており、どの家具にも金銀の装飾が施されていた。

建物の中を一通り見て回りリビングに置かれたソファに横になつた時だった。不意に入り口の扉からコンッ…という遠慮がちなノックが聞こえてきた。どうやら兵士ではなさそ

うだな。

「誰かな…？開いているから入つてきてもいいよ。」

俺がそう声を掛けると、ギイイ…と扉が開き、ノックをした女の子が姿を現した。

「竜神…様…？」

そこにいたのは、先程広間で出会つた狐の少女だった。先程の粗末な服装とはうつてかわつて丈の短いパレオドレスを身に纏い、肩の結び目で抑えていた。布は薄く、胸とフサ毛の膨らんだ身体のラインがハツキリと見える。俺の気を引かせるためか、国王に半ば強制的に着せられたのだろう。扉の背後に迷彩姿の兵士が一人様子をうかがつていたが、俺と目が合うとすつと通路の向こうへと姿を消し、彼女一人が俺の前へと残された。

（バタンッ！）

「キヤッ！」

扉が閉じられた音に少女はびくつと耳を逆立てた。反射的に一、三歩歩きかけたが、震えていた彼女の足がもつれてしまつていて。俺は歩み寄り、転んでしまつ前に彼女をフサ毛へと飛び込ませる。

(バフッ！）

抱き留めた彼女の丈は俺の腰の上辺りまでしかなかった。かなり小柄な子だ。少女は俺の顔を見ると一瞬目と耳を大きく見開いたが、身体を小刻みに震わせたまま頬を俺の胸に押しつけてきた。どうやら未だにイケーホにされると思いつこんでいるみたいだ。

「……あ、あの……！」

「名前…教えてくれるかな…？」

「え…？あ、キズナ…キズナって言います。その…。」

キズナと答えた少女はそこで一度言葉を切つた。一呼吸再び話し始めたが、さつきより声が震えているのが俺には分かつた。

「もう覚悟は出来てます…。でももしお願いできるなら、せめて痛くしないで…。」

彼女の表情を見ると怯えた様子は見えなかつたが、もう達觀したような諦めと悲しみが混ざつた表情をしていた。そんな彼女に俺は背中の羽を広げると、そのまま彼女を優しく包み込んだ。驚くキズナに俺は「コッ」と微笑んだ。

「心配しなくて良いよ。イケーホなんて要らないよ。」いつもしながらればあの魔王、君に

何をしでかすかわからなかつたからね。」

「要らない…？それじゃ食べないのですか？」

「当たり前さつ、本当にイケニエになんかしないから安心して…。」

彼女の問いかけに俺は頷いた。これで彼女も一安心だらう。そう思つたその時だつた。

「そんな…それじゃ私…天国に…行けなくなつちやう…」

「ええつ…？」

俺は耳をピクッと動かすと、キズナの顔を見つめ直した。見ると彼女の目から涙が溢れ、頬を伝つてこぼれ落ちていた。

「お願いです！私を食べて下さい！！私神様に見守られて天国に行きたい…。あんな怖い

兵隊さんよりもアナタに襲われたい。」

胸に抱きついて懇願する彼女を見て俺は困惑してしまつた。一体どういふことだ、これは？

「ちよ、ちょっと本当に食べないから落ち着いて…、天国に行くこともないんだつてば。」

「何でもします。食べる前にアナタの望むことをしてあげますから。

「いらないつ、特に望むことなんかないつてば。」

「それなら…私だつてオスとメスの間でする快樂のことだつて知つ

ています。あたしで良

かつたら食べる前に竜様が望む限り捧げられても…。」

「いつ…。い、いらないよ…。わわっ、本当によせつて…！」

さすがに、これは答えるのに少しためらつた。こんな美獣の子に極薄の服でその言葉は反則に近い。パレオをはだけさせようとした手を俺は抑えた。絶対に「天国に行く」という願いは聞き遂げられないと悟つたのだろう。キズナはしゃがみ込むととうとう声を出して泣き出した。

「そんな…それじゃあ私は何のために…。」

俺は答えることが出来なかつた。陽気なクリオが居てくれてたら冗談で笑わせることも」とだつて出来ただろうが俺ではそういうはない。どうにかしないと…、俺のお腹にすがり泣くキズナを見下ろしたその時、ふと、キズナの肩に種が付いていたことに気が付いた。この種は…確か…。

「そうだ…キズナ…ちょっとといいかな?」

付着していた種を拾いあげ、銀色の器に入れてみる。その上から土と藁をかぶせると、俺は自分の爪の先端同士をでパチンッ…と弾いた。

「あつ…!…!…!」

キズナが小さく叫んだ。種が入った鉢の中は、爪を弾いた瞬間に、

淡緑色の芽がほこり…

つと生えてきたのだ。芽は見る見るひたに成長し、やがて白く細長
い花びらが咲き開いた。

この地方に自生するホワイトティージーの花のようだ。

「凄い…。本当に龍神様なのね…。」

田を丸くしたキズナが呟いた。成長したティージーの花に魅入り、泣
くことをすっかり忘れ
てしまっていた。

「驚いたかな？僕らが龍神様や竜様…って言われている理由の一
がこれなんだ。故郷じや樹竜つて呼ばれているけれどね。どう、こ
れで少しは落ち着いたかな」

俺はそう言つと、ティージーの花をキズナへと差し出した。

「あ…ありがとうございます…。さつきの兵隊さん達が怖かつたか
ら…、取り乱して、『メ
ンナサイ…竜神様。』」

「本当はアイラスつて名前だけれど…、君がそう呼びたいなら竜神
様でいいや。それにし
ても…、さつきの様子だと兵隊か国王から何か怖いこと言われたみ
たいだな…？」

俺の問いかけにキズナは顔を曇らせると、力無く頷いた。

「さつき。国王と話していたときにあの場を滅茶苦茶にしたのは覚
えていいますよね。その

罪を許すつもりはないみたい。だからもし竜神様に食べられずに済んでも、裁判に掛けず
に死罪にするつて国王も兵隊さんも言つてました。そしてそのまま
死んだら天国にいがず
に地獄に連れて行かれるつて。」

あいつら…、今度会つたら尻尾に油を塗りたくつて火でもつけてや
る。

「凄い怖かつた。きっとその前に辛い目に遭わされて…。私、一人
ぼっちはもうあんな怖
い人達が居る中に囮まれて死にたくない…。」

「独りぼっちは…。家族は？」

「庭師のおじいちゃんが居たけれど、この形見を残して死んでしま
つたわ…。城の雑用で
暮らしていただけれど、今日になつていきなり竜の像を取り上げよう
と兵隊がやつて来て…
その後は、竜神様が知つてている通りね。」

「そうか…。」

彼女の言葉に俺は腕を組んだ。いずれにせよ、このまま彼女をあの
国王達の所に戻すわけ
にはいかない。そのためにはどうするか…。

「よし、キズナ、イケニエはナシだけれど、君に僕の世話係をお願
いするよ。僕の側に居
ればあの連中もまず大丈夫だろう

「ええ、いいのつですかつ？」

「勿論れ…。何か文句を言つてきたりあの国王に『神様の命に逆らうのかつ！』って脅かしかやうから。折角だから、この国で使える権威を最大限に使わせて貰つよ。」

「ありがとうございます…、竜神様。」

嬉しそうにキズナはぺこりと頭を下げた。不安を完全にぬぐい去れないようであったが、それでもどことなく安堵したようなそんな様子だった。

「ホツとしたところで一つ聞きたいことがあるけれど、いいかな？」

「は…？ 何でしょ…？」

「ハラヘッタけれど…『飯どひにかならないかな？さつきのびひくさで、会食がお預けになつちやつたから、夕飯まだ食べていないんだ。携帯食料は全部クリオの鞄の中だつたし。』

「あつ、私のせいで…『メンナサイ…。』

「気にしなくていいよ。あんな連中が居る中じや食べたつて気がしないもの。キズナはお腹は減つていないのかい？」

「私は……いつもお腹が空いているか居ないか分からんですから…。」

俯いて答えるキズナの言葉を聞いて、俺はピンッと閃いた。これが
あればきっと元気にな
つてくれるだろう。

俺はベットのに置いてあつた鞄から、ノート位の大きさのあるケ
ースを取り出した。

「竜神様？… 一体何を…？」

不思議そうに種が入つたケースを覗き込むキズナの耳の毛を撫でる
と、俺は端の留め金を
外し、広げて見せた。中に隙間なく敷き詰められていたのは、形も
大きさもバラバラな雑
多な種だ。

「とりあえず、食事を作るのを手伝ってくれるかな？」

4 国王の策略

結局、俺は賓客の名目でその城に暫く留まることとなつた。城内
の対応は表面的には丁
寧だったが、実際は城からは一歩も出させないな軟禁状態が続いて
いた。国王の言つとお
りその間は何もすることがなかつたので、やりたいことを見つけな
いと終始ヒマを持て余

すことになつてしまつ。そこで、部屋にいる間は俺はキズナと一緒に持ち込んだ食材を使って色々な料理を作つていた。勿論、離宮へ食糧が大量に持ち込まれていたけれど、大抵は海外で加工した保存食品なので、進んで食べたいとは思わなかつたのだ。

このよつな生活が約1ヶ月は続いただらうか。

「ふうひ…食べた食べた。」

その日も俺はキズナと一緒に離宮のリビングで食事を済ませていった。メニューは、野菜のボルシチにラタトウイコ。どれも旅先で作れなかつた代物だ。このままここで料理を作つていればシェフにでもなれそうだ。

「どうだいキズナ… 美味しかつたかな?」

キズナからの返事はなかつた。見ると夢中になつて自分の皿を舐めている。その仕草は可愛らしけれど、頬の毛が皿にくつついてベタベタだ。

「おーおい、とらあえず吹きなつて。可愛い顔が台無じじゃないか。

」

俺は笑いながらキズナにタオルを差し出した。元々は元気な明るい子だったのだらう。

「最近は… 何も動きはありませんね…。」

口の周りにくつついていた汚れを拭き取った時、不意にキズナが話しかけてきた。

「ん？ それってあれのことか…？」

「はい。」

あれ…とはキズナを脅した国王の事だ。あれから何度かやつて来ては大金や宝石を差し出したりキズナを引き離そうとしていたが、俺は全てを断つていた。拉致すら出来ないよにキズナから片時も離れる事がなかつたので、自尊心の強い国王にとつて俺のことをきつと苦々しく思つてゐるに違ひない。

「全部門前払いで断つていたからキズナのことは諦めたのだろう。もつともその矛先が俺へと向けられているかもしれないけれどね。」

「そんな…、竜神様は別に何もしていないじゃない…。」

「いや、俺はあの国王の頼みを全て断つてゐるし、事によつてはやることに口を挟んでる。あの国王にとつては十分邪魔者だらう。まあ、神様扱いだからうかつに手は出せないことは承知しているだらうけれど、その分やるとなつたら徹底的にやつてくれるだらうな。」

「「ゴメンナサイ…その頼みつて私を引き渡すことも入つてゐるのよね…？」

「君が謝る事じゃないってば。君はイケーハでも奴隸でもない。可愛い狐の女の子なのだからね。」

「ありがとう……。」

俺の言葉にキズナの顔がぱあっと明るくなつた。

やつぱり彼女には笑顔は似合つてゐるな。

「ひつしていふとふと、おじいちゃんと食事をしていいた時を思い出す。あの時もひつして二人きりだったかしら。だから、竜神様が良かつたりのままひつしていられたら……。」

「そうか……。」

俺はそう答えるとキズナの頭を軽く撫でた。特に口ひげは出をなかつたが、俺の心の中にこのままキズナに側に居て欲しいと気持ちが生まれ始めていた。

もし出来るになら、俺もこのまま彼女と一緒に……。

「……イラスさん……。」

「うわっ……。」

物思いにふけり始めた丁度その時、入り口の扉がバタンッ……と開か

れ、クリオが部屋へと駆け込んできた。

「ビックリしたつ。そんなに慌ててどうしたんだ…クリオー…？緊急事態かい？」

「ええ…。」

一緒に城に残つたクリオは俺よりは城内での行動に比較的自由が認められていた。そのため、城内外をあちこち回つては、ここでの情勢を報告することが彼の日課になつている。

ただ、今のクリオの様子を見ると。どうやら悪い知らせみたいだ。

「アイラスさん逃げよつゝー！国王がヤバイこと考え始めた…！」

「えつ…？」

「今朝朝食を食べに食堂に行つたとき、衛兵達がアイラスさんとキズナちゃんの事を話しているのを偶然耳にしたんだ。何でも国王から衛兵全員に伝達されたみたい。嫌な予感がしたんで、酒を飲んで酔つていた非番の兵士何人かにそれとなく聞いてみた。」

「何て言つていたんだ、そいつら？」

「凄い分かりやすかつた。答えた兵士全員の答えが、『くつついている小娘は放つておけ、けれど竜は絶対に眠らせて広間へ連れて行け、いいなー』だ…って。

「

「アハハ…やつぱつな…。」

俺の悪い予感は当たつていたようだった。何も言わず黙つこへつた俺達の様子を見て、傍らにいたキズナが不安そうに尋ねる。

「ビハッヒ…？聞いつめて懲らしめるの？」

「いいや。聞いつめてもこいけれど、それじゃ連中は本当のことをまず話さないだろ。」
「そうだな…とりあえずこには何もしないでおひつ。クリオの話しから察するに、とつあえず俺を殺すつもりではなさうだし、向ひつが何を企んでいるか知りたい。」

「ええ…それじゃああの連中の企みを…」そのまま放つておぐの？

「…」

俺はそつぱつと鞄の底にしまつてあつた手帳を取り出した。数行程度ペンを走らせるとい、サインを入れて、その上に自分のフサ毛を添える。脇ではクリオとキズナが不思議そうな顔で手紙に書かれた文字を読み上げていた。

「アイラスさん…それは一体…？」

「なに、こここの状況と俺の心境を詳しく綴つた手紙だよ。クリオ、急で済まないけれど、

ここからプランティアの竜神府まで行くことは出来るかな？」

「竜神様、プランティアって？」

「そつか、キズナは知らなかつたな…。俺達はカイ大陸から旅をして、このファリ大陸のレイルシティまで来たのは前に話したね？プランティアはここに来るときにやつてきた力

イ大陸とファリ大陸の境界の大都市さ。クリオ、その中心街にある竜神府に行つてくれ、あそこで俺の名前とこの手紙を渡せばあとは何とかしてくれ。君だつたら3日もあれば行けるだろ？」「

「車を借りるから2日で行きます！でも途中にある検問はどうじよう？手紙を読まれてもしたら厄介ですよ。」

「大丈夫、中身を見られてもいいようにじょと手を加えておいた。こここの国王が欲しがつていた援助の要請の手紙だとこここの連中に思わせれば、連中も手紙を取り上げることはできまい。それと、竜神府で手紙を渡し終わつたら暫くそこに留まつてここには戻らないこと、いいね？」「

「はい。でもアイラスさんはどうするんです？」

「俺は残る。向こうが何をしてくるか分からんんだ、だったらあえてその手に乗つてやつて何をする気なのか見極めてやるよ。それにキズナを放つておく訳にはいかないだろう。」

「アイラスさんなら大丈夫だと思つけれど……、気を付けて下さいね。」

「ああ。それじゃあクリオ、早速行つてきてくれ、出発は早ければ早いほどいい。」

「はいっ。」

クリオは頷いた。しつかりと封をして、彼に手紙の他に鞄に詰めてあつた携帯食料とジュークを渡すと、俺は城の入り口出向き、急用だと話してクリオを車両付きで出国させるよう促した。対応した衛兵はやや渋い顔をしていたものの、その許可は意外にあつさりと下りた。援助をお願いする（よつに見せた）手紙を見せたところもあるが、竜の周りにいる彼を危険扱いが出来ると思つたのだろう。

「よし、クリオはこれで大丈夫だらう、後は俺達だな……。」

クリオが無事プランティアへ向かつたのを見届けると、俺はパレオの結び目を直すキズナへと見下ろした。

「キズナ、君は俺と一緒に残つて良かつたのか？クリオと一緒に出国するという手もあつたけれど……。」

「いいの……私は竜神様を信じているし、自分の身を守る」となんてできないし……。」

「そうか、確かにその方がかえつて安全かもしれないな。俺も一緒に居て欲しいし……おや……？」

ふと辺りを見回すと様子がおかしいことに気が付いた。周辺警護の兵士がいつもより明らかに多いのだ。俺から見えないよう時に身を潜めてはいるけれど、数が多くて気配を隠しきれてない。

「来たか……。」

兵士がこれまで見たことのないライフルを手にしているのを見て、クリオの不安が的中したことを俺は悟った。国王が竜をどうとかじょと実際に動き出したのだ。

「怖くないかキズナ……？」

「大丈夫、竜神様が側に居てくれれば怖いなんて思わないから。」

俺を眠らせるというクリオの話しから推察すると、おそらく麻酔銃

で遠くから狙い撃ちしてくるか、あるいは……。

(「コン芝…）

不意に足下に、手のひらに収まるような金属の固まりが転がってきた。その瞬間

俺は片手でキズナの身体を抱え、耳元に囁いた

「キズナ……直ぐに口を俺の毛に押し当てるんだ。それと深く呼吸はするなよ。」

「竜神様…これって…！？」

「催眠ガスだ。手つ取り早い方法を使つてきたな。ちょいと一芝居を打つつもりだからキズナもそのまま眠つたふりをしていてくれ、その方がキズナも怖くないだろ？。」

「ええ、でも竜様は大丈夫なの…？」

「竜に効くガスなんてないよ。」

俺の言葉にキズナは直ぐに俺の胸へと口を押しつけた。キズナの暖かい口の感触が毛に伝わってきたけれど、今はそれを気にしている場合じゃない。兵士が隠れている物陰をチラツと見ると、僅かにチラチラと動く影が見えた。催眠ガスが効いたかどうか、未だに隠れて様子を伺っているらしい。

「これで……いい……？」

「上出来だ。絶対俺の手を離すなよつ。俺も……離さないから。」

「うとう……」

口を胸のフサ毛に押しつけたキズナは大きく頷いた。ようやく姿を現しこちらへと走り寄つてくる兵士達を一旦見届けると、俺はキズナを抱えたままそのままで床へとに横になった。

5 神竜の怒り

横になつて目を閉じて間もなく、俺は予め用意されていた半ば強引に担架で運ばれた。キズナを引き離すか危害を加えようとしたらい、寝たふりを即座にやめるつもりだつたが、

幸いなことに彼女を引き離されることはなかつた。途中薄目を開けて辺りの様子を見ると

階段と煉瓦の壁が見えた。どうやら城の更に高い所へと登つているらしい。その間兵士達

は何も言わずにずっと無言のままだつた。

階段が終わり、そこから続く狭い通路を通り抜けた時だつた。

「うおおおおおおつ……！……！」

前方から妙に騒がしい、かなり広い範囲のあたりから声が聞こえてくる。

「い、一体何……？」

「シッ……静かに……。」

そつと辺りの様子を伺うとそこは城のバルコニーにだつた。俺の前方には国王とその取り巻きが立ち並び、その先には群衆達がバルコニーを囲むように広がる広場を埋め尽くして居るのが見えた。

国王が一度だけ俺の方を振り向いたが、直ぐに前方に向き直ると、胸を張つて堂々とした体勢で、設置された複数のマイクの前で群衆へと語り始めた。

「諸君、もういゝ存じだと思つがこの通り我が国に幸運の神である竜様が現れた。この 200 年ぶりの訪問によつて我が国にとつて歴史的な日となるだひつ。本当に竜様が来て頂けるとは、実に素晴らしい！」

誓めまくつては居るけれど、この国王に誓められたつて全然嬉しくない。なんだか神様といつより、まな板に載せられた鯉になつた気分だ。

「この度、この竜様に我々を正統な国の盟主と認めて頂いた。そこで、ここに居る竜を崇める帝政を、竜様の意向により今後行つていく！」

拡声器から国王の声が広場へと伝わって聞こえてくる。まだ国王の演説に戸惑っているらしく広場はガヤガヤと騒がしくなってきた。

「よつて、近日中に憲法の改正、及び戴冠式を行つ。国家として皆の協力を期待したい。」

「大体の状況は飲み込めてきた。あの国王…皇帝になるつもりだな。」

キズナに向かつて俺は囁いた。群衆のざわめきが更に騒がしくなり、耳元で囁かないとまく聞こえないくらいだ。

「皇帝…？今だつて王様だから全然変わらないんじや…。」

「いや、ちうでもないよ。王様と皇帝だと、法律を作る時の制約が全然違うんだ。例えば

自分勝手な法律も今の国王では作るのは難しいけれど、皇帝になれば簡単に作れる。どんなにみんなが反対しようとも関係ないからね。大方皇帝になつて、みんなの財産をかき集める腹づもりなんだらう、全く。」

「そんな酷い…！竜神様…、どつするの？」

「潰す。」こいつの皇帝戴冠式の片棒をかつがされてたまるか。」

俺はそう呟くとその場でムクリと起きあがつた。背後の翼を一瞬バサリと広げると、おお

つと群衆が一瞬どよめいたが、直ぐ前で演説を続けていた國王はまたたく氣づかない。俺はその國王の直ぐ前後に立つと、出し抜けにでかい声で話しかけた。

「おい、誰が皇帝に認めただつー?」

「ん?誰だアン…『あやああああつー…』」

振り向いて俺の姿を見た途端、國王は飛び上がつた。マイクに國王の悲鳴が広場中に響き渡る。

「つゅつゅ、つゅつゅ 龍様!…?」

「誰が龍様だ?俺はこの國を國の國の盟主だか帝政だか承認した覚えはないし、するつもりはない地でもないぞ。催眠ガスで寝かせようとして、なににいつてるんだアンタ!…」

國王を見下すよつこじて俺は怒鳴りつけた。むろんマイクのスイッチは今も入つたまゝなので、全部の声が広場の全員にまる聞こえだ。

「そういえばアンタ、『命そのものを差し出す』ことも私にはたやすいことです!」 だと云つていたな。しかも実際にココにいる子を本当にイケヒコ差し出して…。國民の命を守るどこのか簡単に売るよつな國王に、國を治める資格なんてない!」

「つゅつゅ、龍神様…。そ、それは私が進んで言つたつもりで

はなく…。それに…彼女も楽園に行くために死ぬのを望んでいて…。」

「そんなの望んでないっ…！」

よつやく喋れるようになりかけたその時、それまで黙っていたキズナが国王の声を遮るよう叫んだ。

「私もうイケーハになりたいだなんて思わない！死ぬなんて絶対に嫌よ！」

「何つ…？」

国王は目を剥いた。余程仰天したらしく、背後に見える尻尾の毛が逆立っている。

「例え天国に行けたって、私は今ココにいるほうがいい。だから死んで役に立つよりも、生きて役に立ちたい！」

「な、なんだと…？」、「ノノクソガキ！」

「このワイン縞クソオヤジ！」

ワイン縞クソオヤジと聞いた途端、俺はたまらず噴き出した。国王の顔はもう真っ赤だつたが、背後の護衛達はキズナを取り押さえようとせず、必死で笑いを堪えていた。

わあ、じたなやう取りを聞いて群衆が黙つて見ている筈がない。

「おこひ、話しが違ひじやねえか！」

「いねせどひこひ事だ？」「だかひ詰つただひへ、あの国王が言い
ひに言つたひ。」

「龍様の恩恵が本当に貰えるのか、嘘つき国王め！」

広場の騒ぎは徐々に大きくなつてこつた。こんな王なんて捨ててしまえ…とか国王を辞め
るとの声も怒号に混じつて鬨ひ立つてくる。

「陛下…えひあるんですかひ…？」

「いこひを殺…あ、こや殺したひますい、な、なんとかし……！
ヒハイ…」

オロオロする国王に向かつてキッと国王を睨み付ると、国王が後ず
れつた。

「もひこれ以上は俺は何も言わん。別にあなたを王の座からひめす
り落とすつもりはない。」

けれどあなたがやる」とせ、皇帝になる」とじやなく王として国を
立て直す」とだひ。

但し…。」

俺はそひで言葉を切り、バシンと尻尾で床を叩いた。その瞬間、
ひ…とこひ小さな

声を上げ、国王は耳をペンシと立てて震え上がつた。

「それでも尚皇帝で好き放題するといつのなら、俺が相手だ。それとも、竜には効かない

その豆鉄砲で勝負を挑むつもりか？」

竜相手では銃で太刀打ちは不可能、国王もそれは分かつてゐるらしかつた。

「う…う…。恐れ…入りました…。」

国王がぽつりと漏らすと、大衆が見ている中、その場へとがくくりと俯いた。

勝負あつたな…。これでもう大丈夫だろうと内心ほつとため息を付いたときだつた。

（ガニッ！――！）

不意に直ぐ脇から、硬い何かが当たつて跳ね返るの音が聞こえてきた。最初は散発的に、

それが徐々に連續して聞こえてくる。

「なんだ？」

俺は驚いて振り向いた。国王の仕業と思ったが、国王も状況が飲み込めないらしく座り込んだままバルコニーの外を凝視していた。

「これは一体どこから…まさか…？」

ハツとなつて広場の方をみると、広場に居た群衆がバルコニーに向かって石を投げつけていたのだった。耳を澄ますと、群衆の信じられない声が俺の耳に聞こえてきた。

「もつ国王なんて信用ならねえ！」

「竜も金も全部俺のモノだ！」

「革命だ！」「そんなもの居るか、俺が皇帝だ！」

「竜を俺に！」「俺に！..」「..」「俺に！..」

「...しまつた！..」

ギラギラとした表情で口々に話す群衆を見て、俺は愕然となつた。よくよく見ると広場のあちこちで殴り合いや暴動が起き始めている。その時、ふと初日の会談後にクリオが語った言葉が俺の脳裏をよぎった

（いつなつたのもやっぱりみんなあの国王が悪いのかな？）

「クリオ、この国をこんなにしてしまつたのは国王じゃない、この国の獣全てだつたんだよ。クツ！..」

迂闊だった。このままでは革命なんて起こらない。それどころか政府が消滅して酷い内乱

が起ころるだろ？。

怒号が沸き上がるよつて聞こえ、バルコニーには更に投石が投げ込まれた。

俺にも石が当たりそうになるが、群衆達はそんなことはお構いなし。周囲では先程までいたボディーガード達はとっくに逃げ出し、取り残された国王が柱の隅で長い耳を伏せて小さく震えていた。最早、この国王に期待できるとは何もなかつた。

「お願い…みんなやめて…！」

キズナが横倒しになつたマイクに向かつて泣き声で叫んだが、怒号であつという間にかき消された。

「失せろー！メェそここの竜を独り占めして好き放題しようとしているんだろ！？」

「あのガキだ！あのガキを叩き出せ…！」

「いいや、イケニエにしてしまえ！竜は俺達の一族のものだ！」

群衆の返事は無慈悲なものだつた。もつ、口の国の人はここまで心を貪しくなつてしてしまつていたのか…。それでもキズナが何か言おうとして身を乗り出したその時、嫌な悪寒が背筋を走つた。

「…！キズナ！危ない！」

俺は素早くキズナを手元に抱き寄せた。その瞬間、速球で飛んできたブロックの破片が、
キズナのすぐ目の前を通り過ぎ、外壁に当たり砕け散った。群衆達が近くまで押し寄せ、
一部の獣が高速で重い破片を投げつけてきたのだ。

「キズナ、大丈夫か？」

「うん私は大丈夫、…アツ。」

ハツとして下を見ると、石の破片に混ざり、キズナがいつも大事に抱えていた竜の像が床に転がっているのに気が付いた。キズナが慌てて拾いあげようとしたその時、

「……割れてる……」

キズナの竜の像は台座の部分が粉々になり、コンクリートの破片と最早見分けがつかなくなつていて。先程飛んできた石の一部がきっと像にあたつたのだろう。キズナが必死に守つた像がこうなるなんて…。そう思つと、俺には怒りの感情が沸々とわき上がりてくるのを覚えた。

「いいかげんにしろ、こん畜生ども…………！」

これほど腹が立つたことはかつてなかつた。畜生つて言葉は比喩なんかじやない、本当に

「ん畜生だ！」の連呼は！――

「……」まで腐りきつてこるのはない、もう生きてる必要なんかないっ
！－俺が滅ぼしてやる
から覚悟しやがれ、『二郎』虫野郎ども……………。」

毛に埋もれていた爪と牙を剥き出しにした俺の様子に、先頭を走つていた群衆の何人か
が立ち止まつた。けれども迫り来る群衆の流れは変わらなかつた。
でも、怒りに燃える今
の俺にそんなことは関係なかつた。

もう悪龍と呼ばれてもいい、竜神でなくともいい。この爪と牙で
片つ端から… そう覚悟を決めたその時だった。

「ダメ！！！」

突然、彼女が耳元で叫ぶと、そのまま俺の首つ玉にしがみついてきた。戸惑う俺の目に彼女の濃い瞳が映った。

「竜神様やめて！！この国が滅ぶのは私は嫌！！大好きな竜神様が
悪竜になるのはもつと
嫌！！それよりも、竜神様と一緒に幸せになりたい！！！！！！お
願い、私の願いを聞き
入れて！！気持ちが收まらないなら…こうするつ！！！」

(チュツ！！！！！！)

キズナ そう叫んだ瞬間、柔らかい毛の感触が口に伝わってきた。 キズナが俺に抱きつき、

そのまま唇を重ねキスをしてきたのだつた。

もう俺の腹は決まつた。悪魔になるのはやめた、そして彼女に心底惚れた！！

「キズナ…耳を寝かせて思いつきり僕の身体にしがみつけ…！」

俺は早口でそう答えると、スッと息を一気に吸い込んだ。全部吸い込んだところでグッと喉に力を入れ…。

俺は思い切り吠えまくつた。その瞬間、爆発のような震動が周囲の空気に響き渡る。咆吼は周囲にあつたモノは吹き飛び、直ぐ近くまで押し寄せていた群衆をなぎ倒した。

「キズナツ！キズナ！！大丈夫かつ！？」

未だに胸のフサ毛に顔を押しつけていたキズナにむかって俺は呼びかけた。何度か呼びか

けたところで、キズナの耳がピクピクッと反応し、つりあらと皿を開けて俺を見つめてきた。

「竜神……さあ……今一体何を？」

「間一髪で君の願いを聞き入れたよ。ほら、見てご覧……？」

そう言つて俺が指さした先には、先程まで暴れていた群衆達の姿があつた。誰もがもう動こうとせず、呆けたようにその場に座り込んでいた。

「竜神様……みんな一体何をしたの……？」

「咆吼で一喝して、暫くの間大人しくして貰つた。俺の咆吼、単なる大声とはちょっと違うからね。無事だったのは俺に身体を押しつけていたキズナだけだわい。」

「無事じゃないわよ。尻尾の先にまで震動が伝わってきたし、頭もチヨシトぐらぐらする……でも……ありがとう……。」

安心したようにキズナが言つた。そんな彼女の頭を撫でると、俺は尻尾がピクピクと震えていたりこんだままの国王と群衆のリーダーらしき獸を一瞥し、置んでいた翼をバサリと大きく広げて見せた。

「どうやら、この国の俺の役目はここまでだな。キズナ、俺につか

まつてくれるかな？

「あ……はいっ？」

不思議そうな顔をしながらもキズナは素直に俺の腕へとつかまつてきた。そんな彼女をしつかりと抱きかかえると。俺は広げた翼を大きく2・3度羽ばたかせた。

「竜神様……もしかして飛べるのっ！？」

「勿論っ。その気になればとっととおひな出来たよ、こんなとこ。」

「

俺はそう答えると、トニックとバルニーの床を蹴った。その瞬間、俺の身体はその場でフワリと浮き上がった。

「あああっ！竜様が行ってしまう！」

「竜様待つて下さいっ、もう何もしませんから！…！」

浮き上がった瞬間、群衆達の僅かなざよめき声が聞こえてきた。必死に立ち上がりとし

たり、俺へと手を伸ばす姿が見えるが、まだ半口は動けないだろ？。「あんた達に最後に一つだけ言つてやる。一つは200年前に訪れた伝説の竜、その名前はイギラス＝ラ＝ドラグーン＝プラト、俺の祖父だ！」つ、そのイギラスとい

竜が一百年前にこの国が前に豊かになつたといつて伝えは残つてゐるな？あればまるつきし全部嘘だ！」

直ぐ上空でホバリングしつつセリフ叫ぶと、動搖と困惑の反応が下から聞こえてきた。腕に抱かれたキズナも驚いたような顔で俺を見上げている。

「爺様が言つていた。その頃の国民はみんな国を豊かにしようと日夜必死に頑張つていた
つて。自分たちの手で地質を調べ、鉱脈を見つけ、それを国民に公平に分配するシステムを作り上げた。爺様達も手伝つたけれど、届けようとしたけどのめり豊かになつたつて話
しだ！竜の恵みが欲しいならあとは自分たちでどうするか考えろ、それすら出来ないのならもう俺は知らん！」

それだけ言つと、俺は再び羽を強く羽ばたかせた。

「ああつ！行かないでくれ！…」

「た、頼む…最後の…チャンスを…」

「断る…竜にすがるな、自分にすがれ…！」

思い切り舌をだしてそう答えると、俺はそのまま上空へと飛び上がつた。群衆の上半身だけが右往左往する姿が下の方に見えていたが、すぐに景色に溶け込んでしまつて見えなく

なつた。

そのまま上空に飛び立った俺は、一路北の方角を目指して進んでいった。眼下には濃淡のある森林地帯がずっと続いている。レイルシティはもう遠い彼方に震むようにしか見えなくなっていた。

「ありがと…。」

胸に抱かれたままのキズナがぽつりと呟いた。その言葉に俺は首を振った。

「いいや、お礼を言うのは俺の方だ。もし君が止めなかつたら、流血沙汰は避けられなかつただろ？… ありがと、キズナ。」

俺の言葉にキズナは恥ずかしそうに胸に顔を埋めてきた。

「これからどうするの？..」

「プランティアに向かうよ。クリオがそこで待っているから合流しよう。あとは今回の件について龍神府が色々処理するように依頼してあるから、暫くはそこに滞在することになるかな。」

「いい人達…多いの？」

「いろいろ…かな、いい人が多いと思うけれど悪い人だつて少しはね…。さつ、少し速度を上げるからしつかりと捕まつていで。」

「はい…竜神様。」

「そろそろ俺を竜神様と呼ぶのはよしてくれ。アイラスつて呼ばれた方が嬉しいな。」

「はい。アイラス…様。」

「あはは、やつぱり「様」は付けるのか…。でも、それでも構わないや。」

俺は笑うとじつと背中に乗るキズナに目を向いた。淡黄色だつたキズナの毛は、夕日を浴びてキラキラと黄金のように輝いて見える。

「キズナ…もしかしたら君つて女神様なのかな…?」

「…?」

「…なんていふか凄い綺麗に見えるから…。その…心を奪われるくら…にね…。」

「やだ…アイラス様つたら…。」

顔を真つ赤にして恥ずかしがつてゐるが、内心表情は嬉しそうに見

えた。こんな綺麗な

子と俺は今までずっと一緒に居たんだな…。いいや、もつ今までだけじゃ満足できない…。

「…さすなすつと俺の背中にこいつして乗つてくれないか…、いつまでも一緒に。」

一瞬、キズナは何も答えず不思議そうな顔をしたが、すぐに意味を察したのか目は大きく見開いて俺を見つめてきた…。

「美味しい料理…食べさせてくれる?」

「もちろんさ…。その料理も一人で食べるより一人で食べた方が…幸せだわ!」

俺の言葉に、キズナは何も言わず背中にこギュッとしがみついてきた。眼下の森は後ろへと過ぎ去り僅かな明かりが、地平線の先に見え始めていた。

Hピローグ

「竜神にこのような処置は断じて許してはならない、レイルシティに国際介入を行う!」

翌日、俺とキズナがプランティアの竜神府に到着したとき、既にレイルシティへの対応は

取られていた後だった。俺が書いたレイルシティの現状と国王のふるまい、そして竜神府の象徴役である俺を事実上軟禁したという手紙から、彼らが動き出したのだ。直ちに直下組織の一団が送り込まれ、その日のうちに、俺の咆哮で大人しくなつていたレイルシティは、竜神府が暫定的に援助と治安維持を行うこととなつた。事実上の管理下に置かれることになるけれど、彼らならばレイルシティの人々を、一等、二等市民のように扱いはしないだろう。

それから数ヶ月後、俺とキズナ、そして合流したクリオはプランティアから力イ大陸へ向かう高速鉄道にの個室席に乗り込んでいた。それまで俺はプランティアでレイルシティの再建に関わっていたが、あの処理は竜神府に任せておけば大丈夫の筈だ。

時速300?で地面を滑るように走る高速鉄道はキズナにとつて初めてだろう。滑るようには過ぎ去つていく景色を、彼女は窓に齧り付くようにして眺めていた。黄金の毛は今でも輝いていたが、そのお腹が大きくなつていた。

キズナと一緒に遠ざかる次々と後ろへ過ぎ去る街並み眺めていると、向かい側に座つていたクリオが話しかけてきた。

「もう…あとどれくらいで産まれるのかな、キズナの中の子って。」

「そりだな… もう2ヶ月もつてじるかも。到着したらハンティルで病院探さないとね。」

そり言つと、俺は隣でぴたり寄り添つてゐるキズナのお腹を軽く撫でた。

「どちらの子に似るか楽しみだな…。それにしても不思議だよなあ…。キズナってあんな国の中で独りぼっちだったのによくスレずに生きて来れたと思うよ。」

不思議がるクリオの言葉に、キズナが恥ずかしそうな笑顔を見せた。

「本当に言つとね、私だつて最初は他の獣達と同じこと考えていたわ。イケニエになると思つたときはアイラス様を騙してでも生きたい、樂したいつといつ誘惑はあつたもの。」

「あれ、そりだつたの？」

「うんっ、アイラス様ゴメンナサイ…。でも、アイラス様に出会つたらそんな気持ちなんて吹き飛んじやつた。もう、この龍神様に私の一生捧げてもいいつて思つたモノ。」

「そりだつたんだ。やつぱりそれつてアイラスさん命を助けられたから？」

「うん、それもあるけれど 何よりも凄いプレゼントを貰つた

から。」

「えつ？ 何だいそれは？」

「多分「コレ」のことだろ？ な。」

俺はそう言つと、鞄から白いケースを取り出した。初めてキズナに出会つたときには見せた種の詰まつたあのケースだ。俺はその白いケースを開けると、添え付けのテーブルの上に「コレ」と置いて見せた。

「何ですかそれ？」

「まあ、見て、いらっしゃる？」

そう言つと、俺はパチッと爪を弾いた。途端に種が一斉に発芽し、すくすくと育ち始めた。

数秒と経たずにテーブルの上は、小さな木々で溢れる森になつた。そこで実を付けたのは、

クミンにクローブ、そして唐辛子に胡椒…。

「あつーーこれってカレー粉の材料？」

「大当たり。これに国に来る途中に農家と物々交換した野菜にイネの種も大きくして… 全

部使えば立派なカレーの出来上がりさ。」

そこまで説明すると、クリオが納得したように頷いた。

「キズナ達に』えられていた食料は全て配給用の保存食品だけだつたんだ。住民どじりか

あの国王ですら新鮮な野菜や果物は口に出来なかつただろう。それでピンときたんだ。新鮮な野菜や果物、そしてお手製の料理をキズナにプレゼントしようつて。俺が一番最初に作ったカレーライス美味しかつたろう、キズナ？」

「うんっ！「美味しい」つて味は初めて。あれでもう龍神様にずつと付いていこうつて決心したの。毎晩何度も好きなだけしてもいい…つてね。」

にこりと笑つてそう答えると、キズナは膝の上に乗つてきた。おいっ、嬉しいけれどクリオが見てるぞ。

「羨ましいなあ…。」

複雑な表情で目のやり場に困つていたクリオだが、不意に真剣な表情になり、俺に問い合わせにかけてきた。

「その野菜や果物を、あのレイルシティの住民がみんな食べていたら、変わつていつたのかなあ。」

「どうだろう、それはあの国の獣次第だね。これを食べて『自分たちでも作ろう』と思うかもしれないし、『もつと欲しいから奪い取る』と思うかもしれない

い。最悪『コレがないと生きて往けないからイケーハを差しだしました』なんてのもあり得るぞ。世の中、みんな同じ考え方を持っているわけじゃないからね。』

「じゃあ…下手したら今の龍神府の管理も無駄になるってこと?」
国外でひつそりと年金暮らしになつたあのダメ国王を呼ぶわけにもいかないし。」

「大丈夫さ。国がどうなつていつかはあの国民次第だけれど、少な
くとも歩む道は出来る
はずだ。物事に「無駄」なんてことはないよ。それに、こんな可愛
い奥さんを一緒になれ
たし、新しい命も生まれたのだし。」

そう言つと、俺は再びキズナのお腹を撫でた。ほんの少し、お腹の
中で何かが動いたよう
な感触が伝わってきた。

「故郷に着いたら、お料理をいっぱい教えてつ。アイラス様の為に
毎日、駆走作つてあげ
るから、私。」

「ああ、楽しみにしているよ。」

「僕もアイラスさんの故郷の街のガイドだつたら、いつでも引き受
けるよ。但し、お腹の
子も含めて料金は3人分アイラスから頂いておくからね。」

「ああ、それも楽しみに つてそりゃないだろつ。」

俺達のやりとりに、キズナがクスクス つと笑っていた。

窓の外には、故郷の太陽に照らされ白く光るハンティルの街が遠くに見え始めていた。

> i 1 4 3 9 9 < r u b y > < r b > 2 0 0 0 <

< / r b > < r p > (< / r p > < r t > おしまい < / r t > < r
p >) < / r p > < / r u b y >

(後書き)

友人から貰つたイメージイラストを追加
書いてくれた友人に感謝つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0641p/>

樹竜の旅

2010年11月24日17時15分発行